

ダム建設に当たって再検討の必要性

石 沢 進

ダムの建設には、ダム建設により、上流に生活する人々と、下流に生活する人々との相互理解とその必要性を十分検討すべきである。すでに計画を予定されているダムについても根本的な観点から再考すべきであると考え。

これまで、建設されたダムの可否についても当然その反省を行い、人間生活にどうしても不可欠なダムであることの意義をそれぞれのダムについて評価すべきである。ダムの中には、その地域の住民とは無関係か、殆ど関係ない状態でダム建設至ったケースもあるように思う。例えば、本誌第15号に掲載した角田山の乙尻沢のダムの目的は何であったか、いまでも疑問が残る明快な説明を願いたいと思っている。

ダム建設にあたっては、自然環境の十分な調査の必要性についても、本誌19号に「道路、ダムなどの建設に伴う植物の実態調査と保護」を取り上げてみたが、小冊子の掲載であり、社会的な話題にならないで、その後の改変に効果が及んでいない。

2000年1月3日の朝日新聞の社説に「ダムが生存を脅かす」が、掲載されており、多分編集の都合で内容は生態系の頂点に立つワシ・タカが話題として取り上げられているが、その背景には、森林とその構成要素がかかわり合っているはずであり、生態系の保全を考慮すべき指摘であり、植物を無視できないはずである。ダムを一つ建設するに当たっての生態系に及ぼす影響の重大さを再考して、次代に悔いのない方向を目指して頂きたいと願っている。ダムが建設されれば、それを境に上流域・下流域の植物相に多大の影響が生ずることを見逃して頂きたくないと念願している。

農 林 水 産 省

2000年(平成12年)1月3日 月曜日

ダムが生存を脅かす



イヌワシ。「鳥の王者」といわれ、てんぐ伝説のモデルである。クマタカ。それに次ぐ大型の鳥だ。

ともにウサギやヘビを食へ、食物連鎖の頂点に位置する。彼らが空を舞う姿は、私たちの周りに豊かな生態系が保たれているかどうかを測る指標となる。その「指標」が、絶滅の危機にある。

全国でイヌワシは三、四百羽が確認されている。クマタカはそれより多いとみられるが、正確な数はわからない。心配なのは、ヒナの巣立ちが激減していることだ。子育てやえさ場となる山地の環境が、ダムの建設によって脅かされている影響も否定できない。

岩手、秋田、福島、群馬、滋賀、島根…日本自然保護協会がまとめた開発の脅威には、各地のダム事業がずらりと並ぶ。

ワシ・タカとの相次ぐ出会い、ダム問題を洗い直す好機だ。建設省など関係省庁は、徳山ダムをはじめ、各地のダム計画の得失を洗い直すべきである。

ダム適地(ワシやタカのすみかは重なりやすい。八羽のクマタカが見つかった熊本県の川辺川でも、計画が進んでいる。岐阜県の揖斐川上流には、水資源開発公団が貯水ダム日本一の徳山ダムを造るつもりだ。公団の調査で、イヌワシが五組、クマタカが十七組も夫婦で見つかった。公団は、その評価を自然保護協会に頼んだ。協会は、道路など関連工事を進めながらでは、本当の実態がわからないと指摘し、工事を中断して再調査するよう求めた。近く改めて意見書を出す。

調査を始めた一九九六年には、この地域で三羽のクマタカの巣立ちが確認された。九七年は一羽に減った。一昨年と昨年はゼロだ。「工事が繁殖に影響している可能性がある」と自然保護協会は懸念する。

い、公共事業にありがちな硬直体質がまたぞいいた、と思われてもやむを得まい。イヌワシとクマタカは、種の保存法で保護が義務づけられている。その貴重な鳥がこれだけ見つかったというのに、環境庁が沈黙しているのも理解に苦しむ。

徳山ダムの計画は、閣議決定から四半世紀たつ。水没予定地の住民はすべて移転を終え、事業の見直しは容易ではない。